

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 9

2018.12

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

contents

01 第9回 キーパーソンに聞く

株式会社クリエイティブオフィスキュー
そらち応援大使 鈴木 貴之 氏

05 特集

炭・鉄・港
～日本遺産の認定を目指して～

11 地域が動く・プロジェクト最前線

- 11 ① 利尻町
離島の特産品や食を楽しめる
- 13 ② 留萌市
るもいコホートピア構想
- 15 ③ 釧路管内市町村ほか
釧路地域の魅力を360° VR体験！

17 地域を創る人

地域で御活躍されているみなさんを
全道14振興局ごとに紹介するコーナー

- 17 檜山編 外崎 雄斗 氏
交流したいならココへ！
ゲストハウスで奥尻島の魅力を伝える
- 18 根室編 浅野 将太 氏
若手漁師による標津産の魅力発信
標津の魚をアピールしたい

炭
鉄
港
特
集

撮影場所：旧住友炭別炭鉱立坑櫓（三笠市）
撮影者：貝沼 正雄
提供：特定非営利活動法人北海道遺産協議会

第9回

キーパーソンに聞く

北海道、空知地域の 埋もれた魅力を伝えたい

北海道を拠点にタレントや映画監督として多彩に活躍されながら、平成30年6月には空知地域の魅力を道内外へ発信する「そらち応援大使」に就任された株式会社クリエイティブオフィスキューの「ミスターどうでしよう」こと鈴井貴之氏に、北海道の持つポテンシャルや可能性などについてお話を伺いました。

株式会社クリエイティブオフィスキュー
そらち応援大使
鈴井 貴之 氏

— 空知の魅力をPRする「そらち応援大使」に就任されましたが、改めてどのようなことを意識して活動されていますか。

北海道、特に空知地域は魅力にあふれた場所ですが、残念ながら皆さんに知られていないことがたくさんあると思うので、微力ながら応援大使として道内はもちろん、全国各地に空知の魅力を伝えたいと思います。

まず第一に、「空知」という名前がやっぱり素敵だと思うんです。北海道らしい「空を知る」という言葉。特に秋は、「抜けるような青空」で、一番良い季節ですね。

僕は8年ぐらい前から空知管内の赤平市に居を構えて、今は年間の7割ほど、赤平市に住んでいるので、地元の良いなどはよく知っているつもりです。例えば、赤平市には産業が無さそうに見えますが、ロケットの打ち上げなど宇宙開発を行っている「株式会社植松電機」さんがあったり、「株式会社いたがき」さんはあの一流ブランドであるエルメスが認めた鞆屋さんだったりします。そういうことが意外に知られていないのです。赤平市だけでも日本全

国に誇れる企業がいくつもありますし、空知全域のこうした魅力をもっともっと知っていただけたらと思います。

北海道といえば、どうしても札幌市や旭川市などの大都市圏を中心として考えられてしまうので、空知地域は札幌市と旭川市の間で、通り過ぎす場所と考えられることが多いのですが、空知地域に立ち寄っていたら、実は見たり、食べたりするものがたくさんあります。

空知地域は僕の生まれ故郷でもありません。父親が教員で転勤族だったので、北空知、中空知、南空知の全部の地域に僕は住んだことがあるんです。特に、空知は産炭地で、古い話ですけど、戦争に負けて日本を復興させるために、石炭エネルギーが必要となり、産炭地では24時間交代制で寝る間もなく石炭を採って、そして鉄鋼業が栄え、自動車産業が生まれ、今日の経済大國日本となりました。その根底には石炭の力があつたと思います。ですが、エネルギー政策の転換によって、石炭の産地であつた北海道や九州は、使い捨てられた地域のようになっています。そ



の産炭地が自分の生まれ故郷であり、育った場所なので、非常に寂しいし、悔しいという思いがあります。「皆さん、もう一度空知に目を向けてください。今こんなに豊かな生活ができるのは、産炭地のおかげですよ」ということをもっともっとアピールして伝えていきたい。だから今、炭鉱遺産を盛り上げようという動きもありますし、後志や胆振を含めた「炭・鉄・港」の動きもありますから、その辺も含めて空知地域を中心に北海道を応援していきたいと思っています。

——8年ほど前に赤平市に引っ越されたきっかけは何だったのでしょうか。

赤平市が夕張市に続いて財政破綻になるかもしれないと言われ始めたときに、市の会議に参加してほしいというオファーを受けまして、月に1回札幌市から赤平市に向いて、様々な会議に参加していました。ですが、会議が終わったら僕だけ札幌市に帰るわけです。札幌に帰る車中で、いくら僕が赤平市の出身者といっても、「よそ者」だなと感じてしまつて。会議の席でい



鈴井 貴之（すずい たかゆき）氏 略歴
1962年赤平市生まれ。タレント・構成作家としてHTB「水曜どうでしょう」などの数々の人気番組の企画・出演に携わり、2001年からは映画監督としても活躍。本年6月に「そらち応援大使」に就任。

ろいろなことを申し上げても、「偉そうなことを言っても結局は札幌市に帰っているではないか」とか、「赤平市と向き合うには、僕がこの地に住まないダメだ」という思いがあつたものですから、実際に居を構えて、住むことにより皆さんに仲間だと認めていただくために、赤平市での生活を始めました。

——実際に赤平市にお住まいになられた感想はいかがでしたか。

僕が住んでいるところは赤平市の何もない原野で、最初はどやうやって切り開いていこうかという状況でした。最初の1年間は札幌から通い、草刈り機でクマザサを刈つた後、チェーンソーで500本くらいの木を自分で切り倒し、そして、重機で切り株を抜くために、石狩市の教習所で講習を受けた後、残つた切り株を抜根しました。

これから冬場を迎えますが、道路から家まで200mくらいあるので、除雪のためのホイールローダーも購入しました。ですから、いざとなつたら赤平市の除雪の手伝いにも行けます。市の人に「鈴井さん、除雪上手だね」と言われていますから（笑）。ただ、今でこそ重機の扱いにも慣れてきましたが、初めは大変でした。仕事で3日くらい家を空けていると、雪が積もつていて、自分の敷地に入れなかつたんです。そして、200mを除雪するのに1時間以上かかりました。

最初は「あくあ、除雪の時間無駄だな。何をやっているんだか」と思うこともあつたのですが、今はその時間さえも楽しみになってきています。その時間に色々なことを考えたりできますので。それに最初は除雪に90分かかつていたのが、次は60分程度で除雪できるようになり、今では45分で終わるなど、要領が良くなることも楽しいです。

他にも、実は私の家は上下水道が通っていません。というより、山なので通らない。「上下水道を引くのは無理です」と言われてしまいました。そこでどうしようかと思つたときに、昭和初期に作られた大きな貯水槽があり、自然の沢水をそこで濾過し、生活用水に使っている地域がありまして、そのパイプが偶然僕の土地に通つていたので、そこから水を分配してもらい生活用水に使っています。ただ、沢水を管理していたおじいちゃんが4年前くらいに亡くなつてしまい、後はおぼろちゃんたちしかその地域に暮らしていないので、唯一の男手である僕が、春と秋に貯水槽の清掃や水の管理をしています。実は、昨日と一昨日、僕一人ですつとそれをやりました。1km程度の沢道に生えている草を刈り、枯れ葉を清掃して、次に貯水槽の水をポンプで排水した後に、貯水槽を綺麗に清掃してまた元に戻して、と。最初は本当にしんどかつたのですけれど、今はそれが日常ですから、すっかり慣れました。そういうことも含めて、

田舎で生活するのは大変ですけども、面白いですね。

また、田舎暮らしは頭を使います。都会は便利だから、頭を使わなくても生きていけます。でも、田舎は不便なので、「どうしよう」、「どうしたらいいんだろう」と考えなければいけないことが沢山あります。「もっとこうやって工夫したら」とか、「もっとこうすれば生活しやすくなるだろうな」と考えているので、脳も常に回転させている状態です。それがドラマや映画の撮影など、自分の仕事にも良い意味で影響していると思っています。だから、意外に何も無い普段の生活がとても刺激的です。

— 鈴木さんはタレントや映画監督として、北海道を中心に活動されていますが、「北海道へのこだわり」を教えてください。

北海道といえば、豊かな「ザ・大自然」といった、とても綺麗な景色などが思い浮かびますが、もう一方で道産子である北海道に住んでいる人たちの「ぶっちゃけた大らかさ」といいますか、「何かしようがないよね」という雰囲気があると思っています。「しようがないよね」というのは否定的な意味ではなく、「しようがないから頑張らないといけないよね」という感じです。根底にあるのは、やっぱり自分たちの祖として150年前に開拓した人たちのDNAがあるからでしょうか、

「何があってもへこたれない」といった北海道民の底力があると思います。

ただ、北海道民の無頓着さなのか、北海道の魅力が北海道民が一番知らないと言われます。オフィスキューに所属している「オクラホマ」の河野真也は大阪出身ですが北海道が好きで、北海道大学に入学して、今もずっと北海道にいるのですが、よく叱られます。「北海道民は自分たちであぐらをかいている。北海道の魅力をちゃんと分かってない」って。そういうことを道外出身者に言われたりすることが面白いと思いますし、北海道の人たち、住んでいる人たちの魅力について、作品を通じて皆さんにお伝えできれば良いなという思いがあります。

「今回の番組で、所属タレントはどこに行くんですか？」

「いや、わかりません」「わかりませんって、タレントにどうやって連絡するんですか?」「それもどこにいるかわからないので、連絡はちよつと難しいです」「そんな番組に、所属タレントを出せるわけじゃないですか」と事務所がストップがかかりますよ。でも、その当時は社長である僕が同行していますから、「何かあっても僕が一緒だから、社長同行なので大丈夫です」となるんです(笑)。「水曜どうでしょう」は、北海道だから、中小企業だからできた番組です。北海道にはその魅力があると思います。東京では、大企業ではできないことを、中小企業でトライ



▶「そらち応援大使」辞令交付式の様子。空知管内24市町の代表者とともに撮影。



▶こちらは各自治体の名産品を手に撮影。空知地域の魅力が詰まっています!

それに、僕は北海道で映画とか様々なことにチャレンジさせていただいていますが、北海道はまさしくチャレンジできる場所です。というのは、北海道は良い意味で失敗が許されるのです。なぜなら経験値がないから。誰もやったことがないことにトライして、失敗しても北海道の人はあまり責めないんです。そして、「失敗したなら、次こそはもう一回頑張ろう」と言ってくれます。東京は経験値があるから、失敗が許されません。失敗すれば、次の人が待っているから、自分の順番が再び来ないのです。

この「失敗が許される」というメリットはとても大きい。失敗が許されない人間は100%以上の力を出し

ません。失敗したら困るから、7割8割の力でしかチャレンジしません。でも、失敗が許される場合は、「やっちゃえ」という勢いで、120%の実力というか、自分の持っているポテンシャル以上のものでトライする可能性があるので、ちよつとした突然変異が生まれる可能性があります。その最たる例が手前味噌ですが、「水曜どうでしょう」という番組じゃないかなと思っています。あれは絶対、北海道外では作ることができなかった。絶対どこかでストップがかかりますから。「水曜どうでしょう」では、大泉洋という所属タレントが、訳もわからず世界各国に連れ回されますが、普通の事務所であれば、



© 2018 『そらのレストラン』製作委員会

▲ 2019年1月25日(金)から全国ロードショー
鈴井貴之氏も役場職員役として友情出演!

とといった感じでした。

——確かに、鈴井さんが企画・出演された北海道ローカル局のテレビ番組「水曜どうでしょう」は、全国で凄い人気です。

それが突然変異だと思えます。あの番組も出たところ勝負で、あんな風に成功するとは思ってないですから。「成功しよう」、「成功しなければいけない」と思って番組を作るものではなくて、「まあ、ダメだったらダメだったでしょう」と開き直ってやってみる。そのチャンスが北海道にはあります。ですから、クランク博士ではないですが、もっと皆トライしていかないと。せっかく北海道にいるのだから、やってみよう、失敗しても皆で笑っちゃえと大らかにやっていった方が良いと思います。

——オフィスキュー所属タレントの皆さんは、北海道をとっても大事にしてください。印象がありますが、会社として北海道とどう関わっていいかと思っていますか。

今でこそ、TEAM NACSの大泉洋や安田顕などは全国的なお仕事をさせていただいておりますが、そもそも北海道の皆さんに応援していただき、育てていただいた経緯があります。ですから、自分たちの故郷、実家はここにありますし、その思いは一生変わることはないと思っています。

また、対首都圏という意味では、地方でも成せば成るといいますが、地方に様々な可能性があるということをお伝え分たが実践することによってお伝えしていきたいと思っています。例えば、オフィスキュー企画の北海道映画第三弾として、来年の1月に「そらのレストラン」という映画を公開します。

第一弾は洞爺湖を舞台に「しあわせのパン」という映画を、第二弾は「ぶどうのなみだ」という映画を空知地方で撮影しましたが、今回はせたな町でチーズをテーマに撮影しています。僕自身も過去に『北海道発信』をテーマとした「nan-hai」や『Made in HOKKAIDO』をテーマとした「I've」という映画を撮りましたが、この「北海道映画シリーズ」は、まだ知られていない北海道の魅力、食、観光、ものづくりなどを伝えたいという思いでオフィスキューが企画しています。

——北海道では、全国に先駆けて高齢化が進み、道外への転出超過も続いています。特に15〜24歳の若者の多くが、進学や就職を機に道外へ転出している状況ですが、どう思われますか。

都会に行つて埋もれてしまうよりは、北海道でチャンスをつかんだ方が良くいと伝えたいです。例えば良くないかもしれませんが、北海道は高校野球で例えると、小さな県の予選のような感じ。5回くらい勝てば甲子園に行けます。大阪府や神奈川県だったら、予選参加校が何百校もあって、強豪校に入っても野球部員が百人もいてレギュラー競争もあります。それよりは、小さな県の予選を勝ち抜いて、甲子園に行つて、一旗揚げるような活躍をした方が良くないか、是非でも都会に行けば良いというものではないと

思います。ただ、僕は学生の段階では道外に出て、経験値を積んだ方がいいとは思っています。でも、北海道に帰ってきて、活躍してほしいですね。

——最後に、北海道、空知地域の今後の可能性についてお聞かせください。

北海道の田舎は不便だったり、なんとなく寂しい状況になっているのは事実ですが、新しい逆説的な発想でチャレンジできる場所でもあります。また、自分の発想力やアイデア次第では、今まで経験したことのない豊かな生活が待っています。既成概念にとらわれない、「あなたらしいチャレンジ」ができるのが北海道の田舎です。やっぱり開拓者ですね。「新しいこの時代の開拓者を望む、集え」と、かつて北海道に移住してきた人たちのように、皆そういう思いでチャレンジしてくれたら嬉しいですね。

